

日本の教育大学学生の性教育経験と意識に関する調査研究

—教員養成段階からの指導力育成を視野に—

楊 欣欣[†] 山根 真理*

*家政教育講座

[†]大学院修了

An Investigation into Experiences and Attitudes toward Sexuality Education among Students of Japanese University of Education: With a View to Developing Teaching Abilities in a Teacher Training System

Kinkin YOU[†] Mari YAMANE*

**Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

要 約

本研究の目的は包括的性教育理論の視点から教育大学学生の性教育経験と意識の実態を明らかにし、今後の日本の教育大学における性教育への示唆を得ることである。方法は質問紙調査とインタビュー調査である。質問紙調査から、教育大学学生の性教育経験と意識の問題点を4点に要約する。①小学校から高校までの段階において教育を受けた内容に偏りがあり、人工妊娠中絶、自慰、コンドームの使い方についての学習はすべての学校段階において少なかった。②大学生段階での学習経験にも偏りがみられ、「妊娠、出産」、「人工妊娠中絶」、「避妊の方法」、「コンドームの使い方」、「性感染症 (HIV/エイズ) 及び予防」、「性交、性的行動と性的反応」に関する学習経験をもつ学生は少なかった。③教育大学で受けた性に関わる授業の形式は単一であり、主に講義という形がとられている。④今後の要望する授業の形式について、専門家の出前授業、演習に加え、模擬授業、実習/実技、現場研修など実際の場面体験があげられた。インタビュー調査結果は質問紙調査結果と重なる傾向がみられ、学生の言葉で詳細が語られた。日本の大学教育において性教育指導にかかわる授業の学習効果をあげるための手法開発、民間団体とも連携し社会全体で性教育を推進すること、教員養成段階から「サイクル視点」をもって学生に性教育指導力をつける認識を広めることが課題である。

Keywords : 教員養成段階 性教育 指導力

I はじめに

性教育は今日、世界的に重要な課題である。国連諸機関による「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」(2009年初版、2018年改訂版公表)は性教育の基本課題と具体的な実践方向を明示し、セクシュアリティ教育を進めていくうえでの世界のスタンダードとして位置付けられている。

しかし、日本の学校現場は十分に包括的セクシュアリティ教育を行うことができない現状にある。第一に学習指導要領の制約がある。楊による包括的性教育の視点からの学習指導要領の検討¹⁾によると、日本の学習指導要領の内容の不十分さ、包括的性教育が示す指導学年よりも遅いこと、妊娠の経過を取り扱わな

い「歯止め規定」などの内容的制限、性の多様性の視点の欠如、小中高校の間での扱う内容の相違などの課題がある。(楊, 2023a, 2023b)

第二に、学習指導要領やそれに基づく教科書、「性教育の手引き」など自治体レベルで作成される教材が実質的には活用できていないということがある。この要因として、多くの教員養成系の大学で、「性教育の指導に関する授業」が行われておらず、性教育の指導方法がわからず、性教育に関する指導スキルを十分に身につけないまま現場に出て行くことが指摘されている(佐光他, 2013)。その一方で、教員養成段階における性教育に関する先行研究は少なく、郡司による教育心理学分野の研究がみられるに留まる。(郡司,

[†]大学院修了 Graduate, Graduate School of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

2017、2019) 楊が 2021 年に全国の教員養成大学を中心とする大学のシラバス調査を行った結果²⁾によると、ほとんどの大学でジェンダー、男女共同参画に関する授業がある一方で、包括的性教育における 8 つのキーコンセプトのうち、ジェンダー、性暴力以外のコンセプトにかかわる内容を扱う授業がある大学は半分に満たなかった。(楊, 2023a、2023b) 日本を含むアジア諸国では教員養成段階から教員をはじめ教育専門職につく学生を対象に性教育指導力を養成することについて本格的な議論はなされていないが、スウェーデンのように 2022 年から大学の教員養成課程において性教育の充実が図られる例もあり(大山, 2022)、アジア諸国における性教育の方向を考える上で参考になると考えられる。

本稿の目的は、包括的性教育の視点から、質問紙調査とインタビュー調査結果の分析を通して、教育大学生の性教育経験と意識の実態を明らかにし、そこにどのような問題点があるかを考察することである。このことを通して、今後の日本の教育大学における性教育のあり方について提言する。その際、教員養成段階から性教育を指導できる人材を育成する視点をもって、データの分析と考察、提言を行う。

II 包括的性教育

1 包括的性教育を軸にする理由

2009 年 1 月に公表された「国際セクシュアリティ教育ガイダンス(初版)」以前には、世界の性教育の実践と研究は、スウェーデン性教育協会と「アメリカ性情報・性教育評議会」(SIECUS)などによってリードされてきた。包括的性教育は、「ガイダンス」以前に、SIECUS によって「包括的性教育ガイドライン」(1991 年初版、2004 年第 3 版)として提起されている。2009 年に「ガイダンス」初版が出されて以来、包括的セクシュアリティ教育のフィールドは急速に発展し、今日では性教育の基本課題と具体的な実践方向を明示し、セクシュアリティ教育を進めていくうえでの世界のスタンダードとして位置付けられている。「ガイダンス」(改訂版、2018 年公表)によると、包括的セクシュアリティ教育は「セクシュアリティの認知的、感情的、身体的、社会的諸側面についての、カリキュラムをベースにした教育と学習のプロセス」(ユネスコ編、浅井訳、2020)である。「ガイダンス」は教育や健康などに関わる政策立案者が、学校内外における包括的セクシュアリティ教育のプログラムや教材を開発し実践することを手助するために作成されたものである。

以上の理由から、「ガイダンス」(改訂版)の枠組みを教員養成段階からの性教育指導力を考えるための枠組みとして適していると考え「ガイダンス」(改訂版)のキーコンセプトに基づいて、調査の設計を行

った。

2 包括的性教育の内容と特徴

包括的性教育で扱う 8 つのキーコンセプト(以下 KC)は「1 人間関係」「2 価値観、人権、文化、セクシュアリティ」「3 ジェンダーの理解」「4 暴力と安全確保」「5 健康とウェルビーイング(幸福)のための方法」「6 人間のからだと発達」「7 セクシュアリティと性的行動」「8 性と生殖に関する健康」である。

田代によると、「ガイダンス」に基づく包括的性教育の特徴は、以下の四点である。①包括的性教育は基本的人権を基盤とする「性の権利」であること。②多様性を前提としたジェンダー平等の視点が置かれていること。③人間関係を中心に据え、広い領域を射程に入れていること。④それぞれの発達段階で「何を学ぶか」という「テーマ主義」から「どのような力を身に付けるのか」という「課題主義」へ転換し、学習者の(発達)課題に重点が置かれていること。(田代, 2018: 96) さらに「ガイダンス」は子ども・若者の性的自己決定能力を育むための知識・スキル提供を具体的に提起しており、教育と健康部門の政策立案者と専門職を基本的に対象としている。(浅井, 2018、2020)

III 調査方法

1 質問紙調査

国立教育大学である A 大学の 1 年生⁴⁾(2022 年度)を対象とした全学必修授業を通して、Web 調査への回答を依頼する方法で調査を実施した。詳細は以下の通りである。

- ① 配布と回収: E ラーニングシステムを通して 608 人に回答を依頼し、124 人の回答を得た。有効回答数は 122 (男子 31, 女子 90, その他 1)、有効回答率は 20.1%であった。
- ② 調査期間: 2022 年 10 月~2023 年 2 月
- ③ 回答者の属性 性別: 女性 90 人 男性 31 人 その他 1 人
学年: 1 年生 124 人
専攻: 性教育に関わる専攻の学生 40 人 性教育に関わらない専攻の学生 82 人
質問紙調査の内容は以下の通りである。

① 小学校から大学までの学校教育において、性教育を受けた経験

項目は天野他及び日本性教育協会の性教育経験項目(天野他, 2001、日本性教育協会, 2019)を参考にし、それを包括的性教育の KC と対応させる作業を経て作成した。

② もっと学びたいこと、将来、性教育に関わる指導をすると考えて、性教育指導に対する自信程度及び自分にとって、指導が難しいと思う内容と理由

③大学の教育において、性教育に関して受けたことのある授業の形式と今後要望する形式

表1 包括的性教育の8つのキーコンセプトと19の性教育の内容項目

包括的性教育の8つのキーコンセプト	19の性教育の内容項目
1 人間関係	13 寛容性、仲間意識、相手を尊重すること 15 恋愛及び結婚、家族
2 価値観、人権、文化、セクシュアリティ	19 セクシュアリティと人権
3 ジェンダーの理解	12 ジェンダー、男女平等 16 性暴力、セクハラ、デートDV
4 暴力と安全確保	17 LGBTQ、SOGI
5 健康とウェルビーイング（幸福）のための方法	14 性の不安や悩みについての相談方法 18 セクシュアリティに関わるメディア情報
6 人間のからだと発達	1 人間の身体の仕組み 2 初経、月経 3 精通、射精
7 セクシュアリティと性的行動	9 自慰（マスタベーション、オナニー） 10 性交、性的行動と性的反応
8 性と生殖に関する健康	4 妊娠、出産 5 人工妊娠中絶 6 避妊の方法 7 コンドームの使い方 8 性感染症（HIV/エイズ）及び予防
その他	11 生命尊重

2 インタビュー調査

インタビュー調査はA大学の教員を通して、学生（3年生）にインタビューへの協力を依頼し、4人の学生にインタビューを行った。調査概要は以下の通りである。

- ① 調査期間:2023年2月～5月
- ② 協力者の性別:女性1人、男性3人 学年:3年生（調査時期）

インタビュー調査の内容は以下の通りである。

- ① 小学校から大学までの学校教育において、性教育を受けた経験
- ② 将来、性教育に関わる指導をすると考えて、自分自身にとって、指導ができる内容、指導が難しいと思う内容と理由
- ③ 将来、性教育に関わる指導をすると考えて、性教育を実施する自信と理由

IV 調査結果

1 質問紙調査の結果

小学校から大学までの学校教育において、性教育を受けた経験について 小学校から大学までの性教育経験および「もっと学びたいこと」「指導がむずかしいと思うこと」の単純集計結果を合わせ、表2に示す。

表2からまず、小学校から大学まで、教育大学学生の受けてきた性教育について、学校段階別に検討する。

① 小学校での学習経験

小学校での学習経験は、KC6「人間の体と発達」に集中している。その中で「人間の身体の仕組み」についての学習経験が一番多い（91.0%）。次いで「初経、月経」についての学習経験を持つ割合が75.4%、「精通、射精」についての学習経験割合は52.5%であった。「初経、月経」の学習経験割合より「精通、射精」の学習経験割合が少なかった。小学校段階で第二次性徴に伴う象徴的身体現象についての学習は男女差があると言える。

またKC1「人間関係」に関する学習の回答割合も多かった。具体的には「寛容性、仲間意識、相手を尊重すること」（57.4%）と「恋愛及び結婚、家族」（54.9%）において回答割合が多い。

KC8「性と生殖に関する健康」に関わる学習については、「妊娠、出産」の学習経験割合が多く、59.8%であった。

最後に、「生命尊重」に関する学習経験割合は多く、52.5%であった。この点は日本の性教育経験の特徴であると考えられる。

表2 小学校から大学までの性教育経験、もっと学びたいこと、指導が難しいと思うこと

n=122 人 (%)

類別 内容	小学校での学習経験	中学校での学習経験	高校生での学習経験	大学での学習経験	もっと学びたいこと	指導が難しいと思うこと
1 人間の身体の仕組みについて	111 (91.0)	118 (96.7)	110 (90.2)	37 (30.3)	17 (13.9)	17 (13.9)
2 初経、月経	92 (75.4)	116 (95.1)	110 (90.2)	23 (18.9)	9 (7.4)	30 (24.6)
3 精通、射精	64 (52.5)	113 (92.6)	95 (77.9)	23 (18.9)	10 (8.2)	48 (39.3)
4 妊娠、出産	73 (59.8)	112 (91.8)	104 (85.2)	37 (30.3)	16 (13.1)	38 (31.1)
5 人工妊娠中絶	2 (1.6)	26 (21.3)	76 (62.3)	34 (27.9)	24 (19.7)	46 (37.7)
6 避妊の方法	15 (12.3)	92 (75.4)	103 (84.4)	23 (18.9)	19 (15.6)	39 (32.0)
7 コンドームの使い方	4 (3.3)	52 (42.6)	60 (49.2)	19 (15.6)	18 (14.8)	68 (55.7)
8 性感染症 (HIV/エイズ) 及び予防	22 (18.0)	106 (86.9)	111 (91.0)	37 (30.3)	18 (14.8)	33 (27.0)
9 自慰 (マスターベーション、オナニー)	3 (2.5)	58 (47.5)	60 (49.2)	8 (6.6)	13 (10.7)	75 (61.5)
10 性交、性的行動と性的反応	13 (10.7)	79 (64.8)	83 (68.0)	26 (21.3)	19 (15.6)	56 (45.9)
11 生命尊重	64 (52.5)	86 (70.5)	91 (74.6)	51 (41.8)	24 (19.7)	24 (19.7)
12 ジェンダー、男女平等	25 (20.5)	61 (50.0)	82 (67.2)	109 (89.3)	49 (40.2)	29 (23.8)
13 寛容性、仲間意識、相手を尊重すること	70 (57.4)	90 (73.8)	88 (72.1)	70 (57.4)	18 (14.8)	19 (15.6)
14 性の不安や悩みについての相談	31 (25.4)	73 (59.8)	84 (68.9)	63 (51.6)	18 (14.8)	30 (24.6)
15 恋愛及び結婚、家族	67 (54.9)	100 (82.0)	101 (82.8)	83 (68.0)	33 (27.0)	23 (18.9)
16 性暴力、セクハラ、デートDV	11 (9.0)	73 (59.8)	107 (87.7)	109 (89.3)	31 (25.4)	28 (23.0)
17 LGBTQ、SOGI	8 (6.6)	34 (27.9)	81 (66.4)	111 (91.0)	50 (41.0)	49 (40.2)
18 セクシュアリティに関わるメディア情報	8 (6.6)	32 (26.2)	57 (46.7)	85 (69.7)	21 (17.2)	36 (29.5)
19 セクシュアリティと人権	17 (13.9)	37 (30.3)	67 (54.9)	103 (84.4)	41 (33.6)	41 (33.6)
20 全く教わったことはない (特にない*)		8 (6.6)		4 (3.3)	15 (12.3)	3 (2.5)
21 その他		1 (0.8)		0 (0.0)	1 (0.8)	0 (0.0)

* 「もっと学びたいこと」「指導が難しいと思うこと」について「特にない」である。

② 中学校での学習経験

中学校での学習経験は全ての項目において、小学校での学習経験よりも経験割合が多い。KC6「人間の体と発達」の中では、特に「精通・射精」の経験割合が、小学校での経験割合との差が大きい。KC8「性と生殖に関する健康」について、「妊娠、出産」のほか、「性感染症（HIV/エイズ）及び予防」（86.9%）、「避妊の方法」（75.4%）、「コンドームの使い方」（42.6%）の学習経験は、小学校での学習経験割合と比べて経験割合の差が大きい。中学校では生殖に関わる身体的機能が成熟すること、性に関わるリスクが増加することが、学習へのニーズを高めているためだと考えられる。

また、KC3「ジェンダーの理解」、KC4「暴力と安全確保」、KC7「セクシュアリティと性的行動」に関する学習経験割合は、小学校段階では少なく、中学校段階において経験割合が多くなる項目である。「性暴力、セクハラ、デートDV」（59.8%）、「ジェンダー、男女平等」（50.0%）、「性交、性的行動と性的反応」（64.8%）、「自慰（マスタベーション、オナニー）」（47.5%）という経験割合であった。

一方、KC2「価値観、人権、文化、セクシュアリティ」、KC5「健康とウェルビーイング（幸福）のための方法」に関する学習経験割合は少なかった。「セクシュアリティに関わるメディア情報」（26.2%）と「セクシュアリティと人権」（30.3%）という経験割合である。

「LGBTQ、SOGI」（27.9%）、人工妊娠中絶（21.3%）に関する学習も少なかった。

③ 高校での学習経験

高校での学習経験割合は、総じて、中学段階の経験割合と比べて大きな違いがない項目が多い。

中学校での学習経験が少ないが高校での学習経験が比較的多い項目は、「人工妊娠中絶」（62.3%）と「LGBTQ、SOGI」（66.4%）である。

KC2「価値観、人権、文化、セクシュアリティ」とKC5「健康とウェルビーイング（幸福）のための方法」に関する学習経験割合は、高校段階で初めて一定の割合を示す項目がある。「セクシュアリティに関わるメディア情報」（46.7%）と「セクシュアリティと人権」（54.9%）であった。

④ 大学での学習経験

大学での学習経験割合は、総じて、小中高校の経験と比べて明らかに少ない。調査対象者が1年生であり、まだ大学の授業を受けた経験が少ないことが一要因として考えられる。

例外的に、高校段階より経験割合が多いのは、KC2「価値観、人権、文化、セクシュアリティ」とKC5「健康とウェルビーイング（幸福）のための方法」及び「LGBTQ、SOGI」である。項目としては「セクシュアリティに関わるメディア情報」（69.7%）、「セクシ

ュアリティと人権」（84.4%）、「LGBTQ、SOGI」（91.0%）において経験割合が高い。

KC3「ジェンダーの理解」、KC4「暴力と安全確保」についての学習は高い学習経験率を保っていた。「ジェンダー、男女平等」（89.3%）、「性暴力、セクハラ、デートDV」（89.3%）、「LGBTQ、SOGI」（91.0%）および「セクシュアリティと人権」（84.4%）という新しい課題に関わる学習経験は大学教育において、学習経験割合が高い。

大学生の性に関わる現実問題から考えると、望まない妊娠、性感染症の拡大、リスクになる性行動に関わる学習経験は極めて乏しい現状がある。項目としては、「妊娠、出産」（30.3%）、「人工妊娠中絶」（27.9%）、「避妊の方法」（18.9%）、「コンドームの使い方」（15.6%）、「性感染症（HIV/エイズ）及び予防」（30.3%）、「性交、性的行動と性的反応」（21.3%）という経験割合である。

(2) もっと学びたいこと・指導が難しいと思うこと

大学生が「もっと学びたい内容」について、全体的に見ると、いずれも5割未満の回答割合である。性に関することを学習し続ける大学生の関心・意欲は総じて低いとみられる結果である。若者の性行動の不活発化と分極化、性に対する関心の低下、性に対するイメージの悪化、性教育への批判の変化（役に立たないと感じた）（日本性教育協会、2019）という現状に関係があると考えられる。

一方、全体的に見ると大学生が「もっと学びたいこと」は少ないが、その中で比較的回答割合が多いのは「LGBTQ、SOGI」（41.0%）と「ジェンダー・男女平等」（40.2%）に関する内容である。ジェンダーに関する内容はほぼすべての教育大学で開講されている。LGBTQ（性の多様性）に関する内容も半分の教育大学で開講されている。（楊、2023a, 2023b）なぜ大学生にとって、学校で比較的良好に学習した内容が今後、「もっと学びたいこと」であるのだろうか。この問いに対する一つの可能性として、現在の大学の授業における学習内容が概説的な内容に留まり、学生自身の性的自己決定を考えるには不十分であることが考えられる。

性教育の「指導が難しい」と思う内容は総じて学校教育において、学習経験が少ない内容であるが、それにもかかわらず「もっと学びたいこと」ではない。「自慰（マスタベーション、オナニー）」（61.5%）、「コンドームの使い方」（55.7%）、「性交、性的行動と性的反応」（45.9%）。一方、「精通、射精」（39.3%）は学校教育の中で学習経験があるにもかかわらず「指導が難しい」と思う回答割合が高い。

(3) 性教育指導に対する自信の程度・性教育指導が難しいと思う理由

表3に「性教育指導に対する自信の程度」についての回答結果を示した。「とても」「まあまあ」自信があるとの回答割合を合わせて16.4%、「あまり」「全く」自信がないとの回答を合わせて46.7%、「どちらともいえない」回答割合が36.1%である。「自信がない」との回答割合は半数弱と、多い。

表4に「性教育指導が難しいと思う理由」（複数回答）の回答結果を示した。「専門知識が不足している」（79.5%）と「指導方法がわからない」（68.9%）に回答が集中している。「恥ずかしい」（28.7%）「指導すべき課題がわからない」（15.6%）も無視できない割合である。

（4）大学での授業の形式と要望する形式

表5は、大学での授業の形式と要望する形式の回答結果を示したものである。大学で回答者が経験してきている性教育に関する授業の形式は主に講義（92.6%）である。「専門家による出前授業」が講義に次ぐ回答割合であるが、32.0%に留まる。性教育の授業の形式は単一であると考ええる。

大学生が要望する授業の形式について、現在の状況と同様に、講義（54.1%）と「専門家による出前授業」（48.4%）を希望する回答割合は多い。そのうち「専門家による出前授業」を希望する大学生は、経験している割合より、かなり多くなっている。

表3 性教育指導に対する自信の程度

とても自信がある	まあまあ自信がある	どちらともいえない	あまり自信がない	全く自信がない	その他
1 (0.8)	19 (15.6)	44 (36.1)	46 (37.7)	11 (9.0)	1 (0.8)

表4 性教育指導が難しいと思う理由（複数回答）

恥ずかしい	専門知識が不足している	指導方法がわからない	指導すべき課題がわからない	特になし	その他
35 (28.7)	97 (79.5)	84 (68.9)	19 (15.6)	1 (0.8)	1 (0.8)

表5 大学での授業の形式と要望する形式（複数回答）

	講義	演習	実験	実習/実技	専門家による出前授業	模擬授業	現場での研修	受けたことはない	その他
大学での授業の形式	113 (92.6)	8 (6.6)	2 (1.6)	8 (6.6)	39 (32.0)	2 (1.6)	1 (0.8)	8 (6.6)	1 (0.8)
要望する授業の形式	66 (54.1)	26 (21.3)	9 (7.4)	23 (18.9)	59 (48.4)	13 (10.7)	13 (10.7)	5 (4.1)	1 (0.8)

2 インタビュー調査の結果

小学校で性に関する授業を受けた経験について、男性の協力者は「印象がない」（Aさん・男性）、「あまり記憶にない」（Cさん・男性）、「あまり覚えていない」（Dさん・男性）との回答であった。女性であるBさんは「5年生と6年生 生理について女子だけで教えてもらったが、詳しくなかった。科目という形ではなかったです。総合的な学習みたいな学活（修学旅行とか野外学習の説明会）でした。自分にとっては大事なことでした。」と話した。

中学校で性に関する授業を受けた経験についてみると、学習経験は身体の仕組みと発達に集中しており、総じて内容は不十分であったと考えられる回答であった。Aさん（男性）は、「中学校1年生で男女の体の違い」について、「直接的表現（言い方）はすごく避

けていくか、仕組みとかそんなことをやるけど、それ以上は特に何もいわない。単純に男性の側の体の仕組みだけを学んで、（子供がどう生まれるのか）全然説明なく」と話した。この時期に、ジェンダーに関わる学習が行われたことを話してくれたのはBさん（女性）である。Bさんは「1年生も2年生も3年生も①ジェンダー（女子らしい）②子供ができるまでとか、どうやって子供ができるのか、自分のからだの構造③ジェンダー、どう子どもができるのかとか、どうやって男女がセックスをするのかみたいのも全て深く教えてもらった」と話した。

高校での学習経験は中学校より詳しくなったが、不十分だったとする回答もあった。Cさん（男性）は「中学校の時よりかは、ちょっと詳しい内容だったかなと思います」、Dさん（男性）は「内容が深くなっ

てくる」と話した。Bさん(女性)は「記憶にないんですけどジェンダーに関すること、一回だけしかない」という回答で、中学時代よりもジェンダーの学習経験が乏しかったようである。Dさん(男性)の場合、「ジェンダーの問題とかセクハラ」についての学習経験がこの段階で初めてあったとする回答であった。「もっと学びたかった」とする要望としては、「望まない妊娠とその対処方法」をもっと学びたかった(Cさん・男性)とする回答があった。

大学での学習経験について、大学で4人の対象者は主に「LGBT、ジェンダー、性の多様性」に関わる学習経験があった。Aさん(男性)は「ジェンダー、LGBT、性の多様性」、Bさん(女性)は「保育学、ジェンダー」、Cさん(男性)は「LGBT」、Dさんは(男性)は「LGBTQ、ジェンダー」を勉強したことがあると話した。

「もっと学びたいこと」については、性に関わる内容ではなく、性教育の教え方に関わる内容が多かった。もっと学びたいことについて、Aさん(男性)は「自分が教える、教え方、子供に真剣に伝えられるような授業があればいいかな、将来先生になる立場として、正しい知識を真面目にちゃんと伝える方をもっと学びたい」、Bさん(女性)は「知識はもってるけど、どうやって教えていいのかを学べたらよかったです」と話した。

協力者が大学で受けた授業の形式は質問紙調査と同様に主に講義という形であった。今後の要望する授業の形式については、ディスカッション、模擬授業(指導案)、実際の場면을体験するという、より実践的な形式を要望している。Bさん(女性)は「ディスカッションができる場面があればいいなと思います」、Cさん(男性)は「指導案を書いたりとか、模擬授業を試みたりとか、そういう実践形の性教育ってあまりないので、それが今の教員が性教育をするってことに対する不安につながっているかなと思うので」と話した。今後の課題として、効果的に大学生の性に関わる関心、知識、能力を向上させるために、性教育の授業形式の多様性を検討することが重要である。

指導ができる内容と指導が難しいと思う内容についての回答をみると、指導ができる内容は主に性交に関係していない内容であり、指導が難しいのは性交に関係している内容であった。性教育指導が難しいと思う理由は主に「専門知識が足りない」と「指導方法がわからない」に集中している。

V おわりに

最後に、本稿の課題である「教育大学学生の性教育経験と意識の実態にどのような問題があるか」に関連づけて調査知見を要約、考察する。

まず質問紙調査結果を要約する。教育大学学生の性教育経験から見ると、学校教育において、性に関わる内容の範囲は小学校段階から高校段階にかけて広がり、内容は詳しくなっていた。しかし教育を受けた内容に偏りがあり、人工妊娠中絶、自慰、コンドームの使い方についての学習はすべての学校段階において少なかった。大学生段階での学習経験にも偏りがみられた。「ジェンダー、男女平等」、「性暴力、セクハラ、デートDV」、「LGBTQ、SOGI」および「セクシュアリティと人権」という新しい課題に関わる学習経験をもつ学生は多いが、その一方で「妊娠、出産」、「人工妊娠中絶」、「避妊の方法」、「コンドームの使い方」、「性感染症(HIV/エイズ)及び予防」、「性交、性的行動と性的反応」に関する学習経験をもつ学生は極めて少ない。質問紙調査の対象は1年生で、2年生以降の教育経験については本調査からはわからないが、これらの内容について性教育に関連しない専攻の学生が学ぶ機会は限定的であると考えられる。

質問紙調査を通して、教育大学生が経験した性に関わる授業の形式は単一であることがわかった。主な形式は講義である。他方、今後要望する授業の形式について、ディスカッション、模擬授業(指導案)、実際の場면을体験するという形式を要望している。調査対象者、協力者が大学で受けた授業の形式は主に講義である。今後要望する授業の形式については、専門家による出前授業、演習、実習/実技や模擬授業、現場研修など実際の場면을体験する形式を要望している。

インタビュー調査から見ると、小学校での学習経験について女性協力者のみ、月経についての学習経験を印象的なこととして語った。一人の経験を一般化することはできないが、月経・射精に関する学習経験とその効果について性別による違いを検討することが課題である。小学校での学習は詳しくなく、中学校での学習経験は身体の仕組みと発達に集中しており、内容的に不十分な面が指摘された。ジェンダーに関わる学習は中学校段階で登場している。高校での学習経験は中学校より詳しくなったが、その内容について不十分だとの指摘があった。高校段階でジェンダー、セクハラについての学習が登場し、同時にジェンダー、妊娠と避妊の方法についての要望が出された。大学では主に「LGBT、ジェンダー、性の多様性」に関わる学習経験が語られ、「もっと学びたいこと」としては、性教育の教え方に関わる内容が多く語られた。

今後の展望として、三点をあげておきたい。第一に、日本の大学教育において、性および性教育指導に関わる授業の学習効果を上げるために、どのような手法を用いるのかを開発することである。第二に民間団体の取り組みを生かしていくことである。日本においても民間団体が性教育の推進に大きな役割を果たし、性教

育を発展させている。教育政策としての性教育の展開が不十分な日本及びアジア諸国において包括的性教育を推進するために、民間団体の性教育実践に着目し社会全体で性教育を推進し、性に関する意識を向上させ、よりよい性教育を展開していくことも今後期待される。第三に教師の指導力育成の課題である。現場教員に性教育を指導できる研修を行うと共に、サイクル視点で教員養成段階から教員志望大学生に性教育ができる能力を身につけさせることも緊急の重要課題だと考える。

付記

本稿は、楊の修士論文(楊, 2023a)を発展させたものである。本研究は愛知教育大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。(課題名:日本の教員養成大学における性教育の実践力の育成に関する考察、承認番号:AUE20220503HUM)調査に回答してくれた学生の皆さま、ご協力いただきました授業担当教員、指導教員の皆さまにお礼を申し上げます。

注

- 1) 小学校から高校まで、体育科・保健体育科、家庭科・技術家庭科の1989年以降の学習指導要領を検討した。
- 2) シラバス調査を行った大学は、全国の国立教員養成大学11校、教員養成以外の国立大学2校、私立大学3校、シラバス調査の実施時期は2022年12月である。
- 3) 1年生を対象にしたのは、ジェンダー、セクシュアリティに関する全学必修授業で協力を得やすかったこと、新型コロナウイルス禍のなか対面授業が行われ、安定した依頼ができたことがある。

参考文献

- 浅井春夫・長香織・鶴田敦子, 2018『性教育はどうして必要なんだろうか?—包括的性教育をすすめるための50のQ&A』大月書店。
- 浅井春夫, 2020『包括的性教育—人権、性の多様性、ジェンダー平等を柱に』大月書店。

- 天野敦子・市古雪江・野谷昌子・石走知子, 2001「小学校における性教育についての教員養成課程学生の意識に関する一考察」『愛知教育大学研究報告』教育科学編 50:33-39。
- 群司菜津美, 2019「パフォーマンスを用いた性教育講演会の学習効果:高校3年生・大学生・授業者の弁証法的関係性に着目して」『国土舘大学人文学』9巻:1-13。
- 群司菜津美, 2017「アクティブ・ラーニング形式による性教育指導に関する授業の学習効果—教員志望学生を対象として—」『日本教育心理学会総会発表論文集』59:370。
- 宮内彩・佐光恵子・鈴木千春・鹿間久美子・篠崎博光, 2013「思春期における性教育としてのピアエデュケーションに関する研究動向」『思春期学』31(2):243-251。
- 日本性教育協会, 2019『「若者の性」白書 第8回青少年の性行動全国調査報告』萩原印刷株式会社。
- 大山治彦, 2022「スウェーデンの性教育のあゆみ—RFSUと義務教育を中心に」一般社団法人「人間と性」教育研究協議会『季刊セクシュアリティ』No.106. Apr. 2022:54-63。
- 田代美江子, 2018『『包括的性教育』はこれまでの性教育とどう違うの?』浅井春夫・長香織・鶴田敦子『性教育はどうして必要なんだろうか?—包括的性教育をすすめるための50のQ&A』大月書店:95-97。
- ユネスコ編, 浅井春夫他訳, 2020, 「国際セクシュアリティ教育ガイダンス 改訂版」, 明石書店。
- 楊欣欣, 2023a『日本の教育大学学生の性教育経験及び指導力に関する考察—包括的性教育を軸にして』愛知教育大学院修士論文。
- 楊欣欣, 2023b「日本の教育大学学生の性教育経験及び指導力に関する考察—包括的性教育を軸にして」愛知教育大学大学院修士論文要旨 (<https://aue.repo.nii.ac.jp/records/2000057>, 2023年11月30日取得)。